口腔内崩壊錠の効果

口腔内崩壊錠に関する研究では、オランザピン口腔内崩壊錠を対象とした研究で、他の剤型に比べ「前に比べ飲みやすくなった」「水なしで飲めて便利」「すぐに効いてのみやすい」（剤型 3646、B）などのポジティブな評価と共にコンプライアンスが改善したという報告、薬物への患者さんの態度が改善した（剤型 3538　B）[20]とする報告があるほか、看護師を対象とした調査では吐き出しが少なく（剤型 3646　B、　剤 3370　Gアンケート調査）、水なしで飲めて便利（剤型 3646、B）、操作が簡単（剤 3370　Gアンケート調査）などの評価がなされています。水無しで飲め、速やかに溶解する簡便性、利便性（剤系 3369　G実態調査）がある一方、一包化できないため、取り扱いの煩雑さが増すことで逆にコンプライアンスにネガティブな影響を及ぼす可能性も指摘（剤型 3378、F）されています。また、オランザピン崩壊錠のほのかな甘みといった味と服薬遵守の関連も可能性として挙げられています（剤 3370　Gアンケート調査）。

そのほか、嚥下困難な症例（剤 3382、G症例報告）、腹部症状により拒薬・拒食に至った症例（剤型 3413、G症例報告）、服薬時に吐き出し行為のある統合失調症と精神遅滞の合併例（剤型 3398、G症例報告）への適用およびコンプライアンス改善が可能であったとする報告もなされています。

デポ剤

デポ剤の最大の利点としては、薬物投与の確実性にある[15]とされ、怠薬を最小限にするための選択肢、不良な服薬習慣のある患者さんへの有効な剤型として推奨（APA）[19]されています。また、患者さんもデポ剤を一度受け入れた患者さんの多くはデポ剤に肯定的であり、またデポ剤を好む理由として簡便性を挙げている（アドヒアランス 3653、G特集）という報告もあります。

＜引用文献＞

1. 吉尾隆：抗精神病薬の剤形とアドヒアランス　新たな口腔内崩壊錠の導入．臨床精神薬理 10:1035-1044，2007
2. 岩田仲生，亀井浩行，山之内芳雄，et al.：常用薬としての risperidone 液剤分包の患者評価と客観評価　抗精神病薬の剤形は服薬アドヒアランスにどう影響するか？臨床精神薬理 9:1647-1652，2006
3. 田澤美穂子，藤井康男，宮田量治，et al.：Olanzapine 口腔内崩壊錠の臨床経験．臨床精神薬理 10:247-255，2007
4. 中根秀之，福迫貴弘，畑田けい子，et al.：統合失調症に対する olanzapine Zydis 錠の有効性と安全性　長崎 Zydis 研究会中間報告から．臨床精神薬理 10:257-269，2007
5. 窪田幸久：Risperidone 内用液による外来維持治療に対する効果の検討．臨床精神薬理 10:271-278，2007
6. 白木淳子，出店正隆：Olanzapine 口腔内崩壊錠が有用であった精神遅滞と統合失

調症の合併例. 臨床精神薬理 9:1809-1814, 2006
7. 渡部和成: Olanzapine 口腔内崩壊錠が奏効した慢性統合失調症に末期大腸がんを合併し拒食・拒薬する1症例. 臨床精神薬理 9:683-687, 2006
8. 松葉卓郎, 滝沢義唯, 法橋明, et al.: 高度視力障害を持つ統合失調症患者のアドヒアランス向上にリスペリドン内用液が有効であった症例. 新薬と臨床 55:1180-1183, 2006
9. 高野照起: 抗精神病薬の剤型に関するスタッフ意識調査　統合失調症急性期治療におけるオランザピン口腔内崩壊錠(ジプレキサザイディス錠)の有用性. 新薬と臨床 56:890-895, 2007
10. 伊藤耕一, 松原良次: Olanzapine 口腔内崩壊錠が有用であった治療不耐性統合失調症の1症例. Schizophrenia Frontier 8:67-70, 2007
11. 武内克也, 酒井明夫, 伊藤欣司, et al.: 【Risperidone 内用液の可能性】 Risperidone 内用液による興奮の改善及びコンプライアンスの向上. 臨床精神薬理 6:799-807, 2003
12. 大下隆司, 白川治, 小川賢治, et al.: 精神病急性増悪に対する risperidone 液剤の有用性　抗精神病薬筋肉注射剤から非定型抗精神病薬液剤へ転換の試み. 臨床精神薬理 7:821-829, 2004
13. 藤川美登里, 都甲崇, 吉見明香, et al.: オランザピンの剤型による服薬満足度の違いについて. 精神医学 49:543-546, 2007
14. 藤井康男: 【医療観察法と薬物治療】 重大な犯罪を犯した統合失調症患者とデポ剤治療. 臨床精神薬理 10:759-771, 2007
15. 高橋明比古, 石郷岡純: 【薬物療法を維持するための工夫　薬物療法への新たなアプローチ】 Risperidone のデポ剤. 臨床精神薬理 5:401-408, 2002
16. 武内克也, 酒井明夫: 【統合失調症の治療最前線】 抗精神病薬内服液の特徴とその使用法. 脳21 8:65-68, 2005
17. 住吉秋次: Risperidone内用液分包品治療によるアドヒアランス向上と再発予防効果の検討. 臨床精神薬理 10:1003-1015, 2007
18. 佐藤光源, 樋口輝彦, 監訳 井: 米国精神医学会治療ガイドラインコンペンディアム, 医学書院, 2006
19. Osterberg L BT: Adherence to medication. N Engl J Med. 353:10, 2005
20. Kinon BJ, Hill AL, Liu H, et al.: Olanzapine orally disintegrating tablets in the treatment of acutely ill non-compliant patients with schizophrenia. Int J Neuropsychopharmacol 6:97-102, 2003

2．結論と今後の課題

非定型抗精神病薬を用いた薬物療法に焦点を当てた看護ガイドラインの開発を目指し、今年度はクリニカルクエスチョンをに基づき、既存のガイドラインのレビュー、および関連文献の批判的吟味を行いながらエビデンスの整理、ガイドライン本文の執筆を進めた。さらに、臨床実践の視点に適合した、使いやすい実践的な内容のガイドラインを作成することを目的に、専門家の意見を取り入れながら本文を精錬した。

既存のガイドラインは治療方針に関するものが多く、効果や副作用を判断するための観察ポイントとその対処、スイッチング時の観察ポイントと対処、服薬を継続するための看護援助については、十分に整理されていない。

看護実践は、処方される薬物の種類によらず普遍的な要素が大きいとされる。そのため、薬物療法を受ける患者の看護として包括的に教育されることが多い。薬物療法に関しては薬理学等の中で系統別の中身が教育されるが、処方薬の内容によって特化した内容であることは少ないであろう。

このガイドライン作成は、これまでの看護実践としていわれてきた普遍的・包括的活動を特定の薬物療法を受ける患者の看護に焦点化した点でこれまでとは異なる。しかし、精神科医療における薬物療法の進歩めざましい今日、新しい知識の普及と専門的知識の進化に向かうことは極めて自然であり、また必要なことであると考えている。しかし、既存のテキストにないこうした内容によるガイドラインを構成するためには、看護師を対象として書かれた文献以外の資料についても看護の視点から整理しなおす必要がある。

そこで、上記内容を含むクリニカルクエスチョンを作成し、既存のガイドラインや文献レビューを行いながら、ワーキンググループにおいて継続的な討議を重ねた。その結果、非定型抗精神病薬の特徴(効果と副作用、服用中の観察のポイント、服用の際に気をつけること)、非定型抗精神病薬への切り替え（スイッチング）（スイッチングの目的や方法、観察ポイントと対処)、患者の生命および QOL に影響する副作用（錐体外路症状、悪性症候群、メタボリックシンドローム、性機能障害）、患者のアドヒアランスを高めるための援助の4側面から構成することとした。

これら看護ケアの4つの方向性は、従来から教育されてきた薬物療法に関する内容をカバーしつつ、さらに処方の変更というクリティカルな時期にどのような看護が必須であるかを含む内容であり、精神科薬物療法という焦点化した看護ケアの方向性を示すものである。

本ガイドラインにおいて集積したエビデンスは治療方針に関する文献が多く、それらのエビデンスをもとに、看護師が何を観察するのか、医師や患者とどのようなコミュニケーションをとるのかという視点から整理した点が本ガイドラインの独創的な点といえよう。

今後は、本ガイドラインの臨床現場における活用を促し、より実践的で使いやすい内容や表現、形態についても検討することが課題と考える。

3．研究成果

宮本有紀，萱間真美，安保寛明，篁宗一，瀬戸屋希，林亜希子，深沢裕子，渡邉雅幸，大熊恵子．非定型抗精神病薬の服薬援助に関する現状と課題．第 27 回日本看護科学学会学術集会，2007 年，東京．

篁宗一，萱間真美，宮本有紀，　安保寛明，瀬戸屋希，大熊恵子，瀬尾智美，渡邉雅幸，北詰晃子，木村美枝子，立石彩美，千葉理恵，矢内理英，松長麻美，小川雅代，沢田秋，船越明子．非定型抗精神病薬の服薬援助に関する看護ガイドラインの開発　－クリニカルクエスチョン作成過程の報告－．第 28 回日本看護科学学会学術集会，2008 年，福岡．